南大塚古墳（みなみおおつか）

【所在地】岐阜県不破郡垂井町大石
【築造時期】７世紀前半

周辺の古墳群　南大塚古墳のある新井から大滝にかけては南へ緩やかに傾斜する段丘上となり、周辺からは高く名古屋や関ケ原方面を眺望できる場所である。かつてこの周辺には 30 基以上の古墳があったとされ、今でもこのあたりを「百々（どど）（塚）」とよぶこともある。

このほかに新井には南大塚古墳にも匹敵する一辺約 20m の方墳となる新井古墳や石材が露出した戸張（とばり）古墳が残る。さらに大滝では大石東野（おおいしひがしの）古墳群や野瀬（のぜ）古墳群などの古墳群も見られる（図１）。

このうち南大塚古墳は 1968 年（昭和 43）の道路工事によって石室が露出し、名古屋大学考古学研究室による緊急調査がおこなわれた古墳である。横穴式石室からは須恵器や土師器などの土器をはじめ鉄鏃や馬具の破片が出土している。

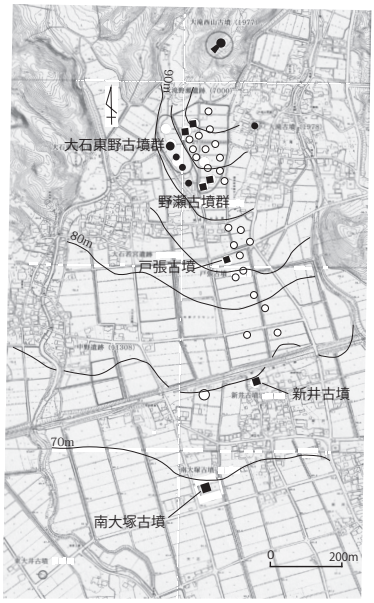
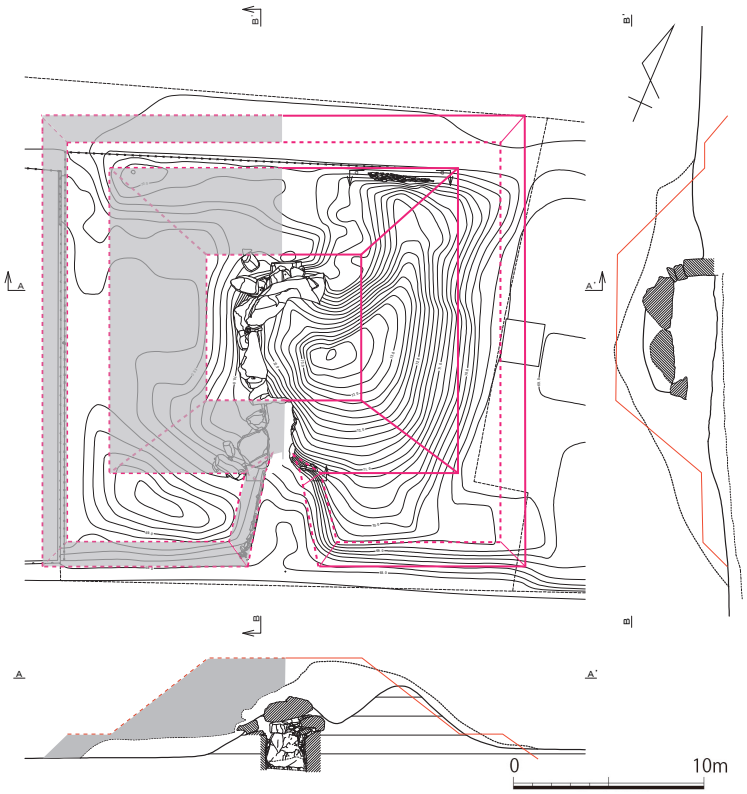


図１　古墳群位置図

墳丘の特徴　墳丘は西側を大きく削られたままの状態にあり、石室の石材も露出したままにある。二段築成となる方墳は一辺が約 25m で、高さは約６ｍとなる大型墳である。墳丘の周囲は調査当時に観察された「幅約５メートルの濠の痕跡」は見当たらない。

墳丘南側に張り出す幅の広い面は墳丘上段と下段の境であり、幅の広い平坦面は横穴式石室に前庭（ぜんてい）部がとりつく特徴でもある。前庭部から墳丘下段の高さは 3.2m、上段は 2.8m ほどになる。下段は地形がゆるやかに傾斜することから背面まで届かず、古墳の南面のみとなる可能性が高い。



＊墳丘東側で推定した形を中心線で折り返し（点線）、墳丘斜面（盛土部分）を網掛け
図２　墳丘図（S=1/400）

過去の調査から

石室入口（前庭部より）

横穴式石室　石室は南東方向に開口し、前庭部を含めた全長は 15.2 m である。玄室（げんしつ）は長さ 5.0 m、最大幅 2.7 m、最大高約 2.5 m で、羨道（せんどう）は長さ 5.1 m、最大幅 2.0 m となる。

玄室の平面形はやや胴張（どうばり）りで、玄門（げんもん）には袖石を置く両袖（りょうそで）式の石室である。玄室の奥壁には鏡石（かがみいし）を置き、その上に 1 ～ 2 石を置いて天井石を支えている。側壁は大型石材を 2 段に積み上げ、1 段目は大きな縦長の石材を横に置いているのが特徴である。

石室内部（玄門より）

天井は 3 枚の石が残るのみで、羨道部分は失われている。玄室の天井石には大きな石が架けられ、奥壁側がやや内傾するほかは天井が平らになるように架けられている。玄門は一段低くした楣石（まぐさいし）と考えられる。

羨道部分の側壁は玄室と同じように大型の石材が使用されているが、それにつづく前庭部はやや小ぶりとなり積み方も異なる。石室から前庭部までの床面には石が敷かれているが、現在は流土などにより埋もれている。発掘調査によれば石室は羨門付近で閉塞されていたようである。

閉塞された前面にあたる前庭部は、「八」の字状に広がる特徴をもつ。ここは天井石がなく、石室が閉塞された後に葬送儀礼（そうそうぎれい）がおこなわれた場であったと考えられる。

古墳の意義　南大塚古墳は出土した副葬品などから古墳時代終末期にあたる 7 世紀前半の築造と考えられ、奥壁や側壁に大きな石材を用いた美濃地域でも最大クラスの巨石墳である。

方墳の造営は円墳をふくめて、それまでの前方後円墳に代わる首長墓の変化として理解される。垂井には南大塚古墳に前後して直径 40m の大型円墳の綾戸古墳が造営される。不破の地に大型の終末期古墳が造営される背景には、ここが東国と畿内をむすぶ重要な地域にあったことを物語る。

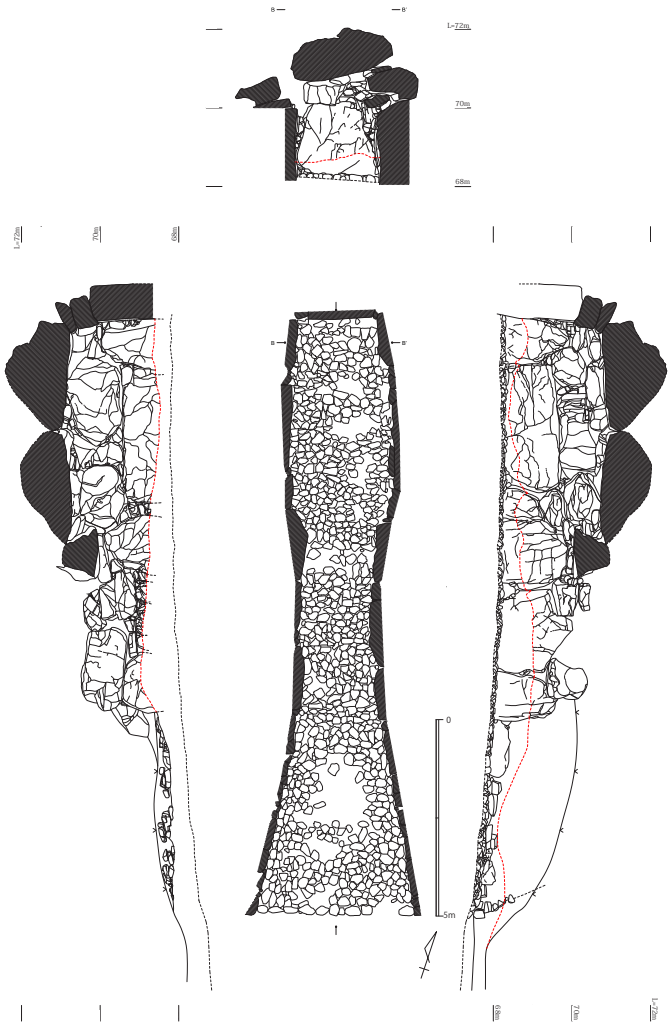


図 3　石室図（S=1/200）

【参考文献】　垂井町　1969 『垂井町史』通史編
垂井町教育委員会　2020 『垂井町遺跡詳細分布調査報告書（2）』

編集：科学研究費基盤研究（B）「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」
(22H00712) 2023 年度（中井正幸・森島一貴）
発行：垂井町教育委員会